



# 田んぼわらしの ささやき

## 田んぼ 10年だより

第19号 2020年10月22日発行

田んぼの生物多様性向上10年(略称:田んぼ10年)ニュースレター  
 発行: NPO法人ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ) 水田部会  
 所在地: 〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F  
 TEL/FAX: 03-3834-6566 電子メール: info@ramnet-j.org  
 ホームページ: http://www.ramnet-j.org

### 目次

八代海・球磨川河口の水田で「田んぼの生き物調査」を体験 八代愛鳥会 高野茂樹.....	1~2
田んぼの生き物の調べ事始め～八代・球磨川河口からのたより～ NPO 田んぼ 船橋玲二 .....	2
農林水産省の生物多様性戦略の改訂が行われています ラムネットJ 金井 裕 .....	2~3
活動紹介～田んぼと生物多様性と自分～ なごや東山の森づくりの会/COND 中島 稜 .....	3
田んぼの生き物を育むお米たち 後藤尚味 / 水田部会からのお知らせ ほか.....	4

\* \* \* \* \*



### 八代海・球磨川河口の水田で「田んぼの生き物調査」を体験

八代野鳥愛好会 高野茂樹

九州の西岸、八代海の球磨川河口右岸には金剛干拓が広がっています。江戸時代に造成された三江湖(みつえご)新地の地先に昭和20年代に造成されたのが金剛干拓(425ha)です。昭和30年代に水田栽培を中心とした営農が始まり、イグサ、ハス田に加え近年は露地野菜栽培が営まれています。私たちは、豊かな干潟生態系が残されている球磨川河口干潟のラムサール条約登録に向けて活動していますが、金剛地区の営農者からカラス類、ヒヨドリなどに加えカモ類による農業被害の問題提起があり、対応に思案していました。

水田の生態系サービスについては、平成21年(2009年)第10回ラムサール締約国会議(韓国、昌原)で「水田決議」が採択されましたが、当時、私も球磨川河口干潟のポスターを持参してラムネットの皆さんと同行させていただきました。

球磨川河口の活動では、水田が水鳥の保全に重要な役割を果たしていることは認識しているものの、水田の生物多様性などの認識についてはまだ不十分でしたので、今回、ラムネットから声をかけていただき、「田んぼの生き物調査」を学ぶことができ、球磨川河口干潟保全の活動にはずみをつけることができました。思いがけなく宮城県の蕪栗沼を中心に活動しておられる「NPO法人たんぼ」理事長の船橋玲二さんが、講師として来ていただくことになり、「田んぼの生き物調査」のノウハウに加え意義や目指すことなどを聞くことができ、大変良い機会となりました。

まず、使用させていただく水田を探すことから始めましたが、「次世代のためにがんばる会」の松浦さんの知人の稲本薫さんを尋ねました。稲本さんは、完全無農薬栽培米「タニシ米」などを生産され、自然農法、無農薬栽培を実施されておられます。幸

い、球磨川河口の金剛地区に水田を営農中でそこを利用させていただくことになりました。新しい出会いがあり、連携の輪の広がりに感謝です。参加者につきましては、小学生と高校生に呼びかけ、1日目に高校生を対象に指導いただき、2日目に小学生と高校生合同の生き物調査会を実施し、子どもたち間のつながりを図ることで計画を進めましたが、コロナ禍の現状はますます厳しくなり、子どもたちの参加が難しく、今回は、野鳥愛好会、がんばる会などの大人たちを中心として指導いただく学習会になりました。

2020年8月29日(土)晴れ、午前中(10:00-11:30)は船橋さんには高野の案内で、球磨川河口・前川河口(干潮時)の観察と金剛干拓の耕作地(稲田、ハス田)や防鳥対策の様子を見ていただきました。昼食後、午後1時、鼠蔵町研修所に集まり、船橋さんから生き物調査の意義について話を聞きました。八代からの参加者は、がんばる会2名、野鳥愛好会2名、そして稲本さんと知り合いのお母さんと小学生の娘さんの7名でした。「Tamboポスター」にびっくり。農村風景の中にいろんな生物が息づき、5668の数字が目を惹きました。数字は生き物調査で確認された生物の種数を表しているとお聞きし、水田が生き物の生活の場として大切であることがしっかりと伝わるポスターでした。びっしりと書かれた学名が生地になっていることにも驚き、「エーッ」と声が上がりました。

講話の後、鼠蔵町研修所から歩いて2、3分のところのある水田で、生き物調査を指導していただきました。網をもって生き物をすくいあげては、「タニシだ。これは何ですか。」などと暑さを忘れて田んぼの周りを歩き、楽しい時間になりました。タニシ、ツチガエル、シジミ類、カニの一種(海の近くのため)、ガムシ、ゲンゴロウ幼虫、アメンボ、アシナガゴモなど観察。タニシに感激し、ゲンゴロウの希少性(熊本県では絶滅危惧IA類)に驚き、幼生と成虫の形態の違いに目からうろこでした。クモ類の網の張り方による種類の違いなども教えていただきました。

マスクを着け、熱中症に注意ながらの観察でしたが、無事観察を終え、研修所(15:00-16:00頃)で、船橋さんから生き



物調査の振り返りとまとめをしていただきました。たんぼの SDG's パンフレットを使って、観察された生物について、農薬の指標種、土づくりの評価種、風致の評価種など、生き物が環境の指標となることを教えていただきました。丁寧に指導いただき、本当にありがとうございました。

初めての取り組みでしたが、11 月にも実施しようということになり、これからの活動に向けての元気をいただくことができました。このような機会を作っていただき、大変ありがとうございました。



## 「たんぼの生きもの調べ事始め」 八代・球磨川河口からのたより

NPO 法人たんぼ 船橋玲二

8 月 29 日、この日も猛烈に暑い日でした。今年の九州は何度も大雨となり、大きな被害も出てしまいました。球磨川河口の干潟では、流木等の撤去作業を進めているところでした。高野さんにご案内いただき、干潟を望む堤防に立つと、天草諸島や雲仙普賢岳が間近に見え、泥の上をヤマトオサガニやトビハゼが歩いています。生きものがにぎわうこの魅力的な干潟の観察は後の楽しみとして、今日はたんぼの生きもの観察です。球磨川河口での取り組みは干潟を中心に展開してきましたが、今回の観察を通じて、隣り合わせのたんぼにも目が向けられたらいいな、との思いで企画されました。

九州は温暖な気候のため、東北地方と比べると田植えから稲刈りの時期に幅があり、自由度がとても高く感じられます。八代はイグサの栽培も盛んな地域。イグサの収穫が終わって、7 月半ば頃に田植えをしても大丈夫だそうです。訪問時、稲穂の揺れるたんぼもあれば、まだ出穂(しゅっすい)していないたんぼもありました。

観察場所は八代市鼠蔵町の稲本さんのたんぼです。稲本さんは自然栽培に取り組まれていて、今年は 10 ヘクタールもの広さのたんぼで米づくりをしています。その内の 1 枚のたんぼにお

邪魔しました。ちょうど稲の穂が伸びて花を咲かせていました。普段は稲が穂を出す前の頃にたんぼに入って生きもの調べをしますが、今回はデリケートな時期なのでちょっと遠慮して畦から網を入れて生きものを探しました。

干潟から数十メートルしか離れていないので、たんぼの中をベンケイガニが歩いています。このあたりはスクミリングガイ(ジャンボタニシ)が各所で見られる地域ですが、稲本さんのたんぼでは日本在来のタニシたちが頑張っていて、スクミリングガイのさばらないようにできているとのこと。こうした仕組みも稲本さんにじっくり教わりたいですね。

NPO たんぼでは 9 つの生物群を対象にして、農薬、土づくり、風致について検討する調査を進めています。農薬の指標はトンボ、クモ、バッタ、土づくりの指標は貝、ミズ、甲殻類、風致の指標は水棲のカメムシや甲虫類、魚類、カエルという顔ぶれです。これらの生きものを定量的な調査でどれくらい確認するかでたんぼの生きもの暮らしやすさや課題を検討していこうとしています。これまでのたんぼの環境づくりは、農薬や化学肥料の使用量に関心が集まりがちでした。しかし、たんぼの生きもの暮らしやすさは、他の環境要素にも大きく左右されているので、もっといろんな視点でたんぼを見つめて欲しいとの願いがこめられています。将来、八代のたんぼでもこんな調査が展開できたらいいですね。

宮城の蕪栗沼や兵庫の円山川など周辺の水田とあわせてラムサール登録湿地になっている地域もあります。今後の球磨川河口の取り組みに期待が膨らみます。



暑い盛りにたんぼで生きもの探しスタート

白いトレーを使って泥の中から生きものを探す



## 農林水産省の生物多様性戦略の改訂が行われています

金井 裕

農林水産省

### ◎ 農水の生物多様性戦略とは

日本の生物多様性保全の基本計画は生物多様性国家戦略(2012-2020)で、環境省は 2021 年度に次期の生物多様性国家戦略をとりまとめるべく、研究会の開催や NGO との意見交換を行っています。

一方で、農林水産省は独自に農林水産業にかかわる部分を農林水産省生物多様性戦略として策定していて、次期生物多様性国家戦略に先立つ今年度(2020 年度)は新農林水産省生物多様性戦略をとりまとめる予定です。農水省の生物多様性戦略は、そのほぼすべてが生物多様性国家戦略に反映される見込みですが、日本の国土の大部分で農林水産業が行われているため、その影響は極めて大きいと言えます。

### ◎ 今回の改訂のポイント

農水省の生物多様性戦略は、農業・林業・水産業に対応した構成になっています。新戦略では、これに加えて、少子高齢化による農山漁村の疲弊への対処、地球温暖化対策とともにサプライチェーンを通じた取り組みが大きく取り上げられることとなっています。

そのため、地域コミュニティの活性化や CO<sub>2</sub> 削減、さらには流通業者や消費者への働きかけや経済・金融分野との連携も戦略に含まれることになると考えられます。

### ◎ ラムサール・ネットワーク日本の取り組み

現在の戦略の農業部分については、文言だけならなかなか良いことが書いてあります。しかし、残念ながら生きもの減少が続



いています。これは、戦略内容が現場で実行できない現実があるためです。地域農家のためとして、生きものへの影響の検証なしに水路のコンクリート化や耕地整備事業が進められています。CO<sub>2</sub>削減対策が、新たな生物多様性への脅威とならないようにしなくてはなりません。

ラムサール・ネットワーク日本が進めて来た田んぼ 10 年プロジェクトは、生産農家から生協や行政、環境保全 NGO まで幅広い方々の参加を得て、田んぼの生きものと稲作の両立・共同への

取り組みを進めてきました。これらの蓄積から、現場で生物多様性向上に必要とされることが導き出されることは多いはずですが、

農水省とは、これまでもラムサール条約の水田決議実現のための水田決議円卓会議準備会で、意見交換を行ってきました。新農林水産省生物多様性戦略に対しても、水田決議円卓会議準備会を中心に、現場からの意見や提言を行ってゆきます。

みなさまからも、意見・提言をいただければと思います。

◎農林水産省生物多様性戦略  
[https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/s\\_senryaku/index.html](https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/s_senryaku/index.html)  
◎新農林水産省生物多様性戦略検討会の設置及び第 1 回会合の開催について  
<https://www.maff.go.jp/j/press/kanbo/kankyo/200821.html>



### 田んぼと生物多様性と自分

新米の季節がやってきました。自分が所属している、「なごや東山の森づくりの会」でも、稲刈りが始まります。名古屋に残された里山である、東山の森には、約 3 畝半ほどの田んぼがあります。

自分がこの田んぼで、活動に関わるようになったのは、約 5 年前からになります。自然に関係のあることをやってみたいという、漠然とした気持ちで、会の森づくり活動への参加がきっかけです。

化学肥料や農薬を使わず、手作業が中心となる、ここでの作業では、様々なことを学びました。小学生の頃に田んぼで遊んでいた時(農家さんには申し訳ない)には、カエルやヒルばかりを見ていて、稲には目もくれませんでした。

しかし、森づくりの会の代表の瀧川さんから人と自然との関りについて教えていただくと同時に、田んぼ活動では、4 月に籾から育て、12 月に餅になるまでの当たり前の体験をする事で、改めて、自然と食について意識することができました。

### なごや東山の森づくりの会 / COND 中島穂太

そして、米だけでなく、田んぼと一体である周囲の環境で、採ることのできるセリ、ツクシ、ヨモギ、コナギなどで季節を感じ、捕って食えども毎年現れるアメリカザリガニで生き物の力強さも感じています。

ほかにも、トンボやカエルなど様々な生き物を身近に感じることができますが、作業中、農薬を使えばどれだけ作業が楽になるだろうかと、ふと思うこともありましたが、その使用により、ここにいる生き物たちへの影響を考えると、使ったら楽だろうという考えは、なくなります。

自分は、生き物が好きです。見る、聴く、触れる、食べるなど様々な体験ができ、生物多様性の宝庫でもある田んぼが好きです。

そして現在、なごや東山の森づくりの会で活動しつつ、今年からは、生物多様性を守り、発信していくユース団体である Change Our Next Decade(COND)に所属しています。



生物多様性の場である田んぼでの経験を活かしつつ、田んぼの良さを伝えていくには、この機会を逃す訳にはいきません。

田んぼでの活動を始めてから 5 年目で、まだまだ新米ですが、頑張っています。



### 「田んぼの生きものを育むお米たち」～食べることも保全活動～

後藤 尚味

ラムネット J の「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト」では、愛知ターゲットの水田版「水田目標」を定め、「田んぼ 10 年行動計画」に基づき、様々な活動を展開してきました。この間の活動の中で、プロジェクトに参加する農家さんや自治体など、農業の現場から出された大きな課題の一つが、頑張っても生物多様性に配慮したお米を作っても、販売に結びつかず仲間が増えていかないという問題です。各地で開催してきた地域交流会、全国集会の出席者からも毎回この問題に関する意見が多数出されてきました。また、CBD の第 15 回締約国会

議(2021 年 5 月開催予定)で決定される予定のポスト愛知ターゲットの中にも「人々の消費行動を変える」という項目が挙げられ、消費者が持続可能な製品・作物を選択することで生物多様性の向上が実現に近づくとされているようです。

田んぼ 10 年に登録している農家さんなどが作る「生きもの認証米」などの情報を都会の消費者に伝え、生物多様性に配慮したコメづくりへの理解をすすめて、食べることを通じて生物多様性向上に貢献できるような仕組みを作ります。そのための第一歩として、WEB サイトでお米の紹介ができるよう、該当する農家さ

ん・登録団体への聞き取り調査を行い、WEB サイトに掲載します。最終目標としては、各地で作られたこれらのお米の販売促進に協力し、生物多様性に配慮したお米作りの仲間が増えて

農村地域がかつての生きものの賑わいを取り戻し、持続可能な地域づくりに貢献することを目指します。



### 参加方法

「掲載情報」と「写真」を事務局までお送りください。メールのタイトルに【生きものを育むお米掲載希望】と書いて送ってください。随時、田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクトのお米の紹介サイトに掲載します。もちろん無料です。

メールアドレス：info@ramnet-j.org TEL&FAX：03-3834-6566

詳しい参加方法は、こちらのサイトを参照ください。【<https://tambo10.org/>】

- **掲載情報**：1.組織名、2.都道府県、市町村名、3.お米の名称（ブランド名）、4.田んぼでみられる生き物「ベスト3」、5.生き物のために配慮していることやアピールポイント（400 字程度）、6.WEB サイトの URL、7.購入方法の案内（kg 当たりの値段、購入単位、送料、支払い方法など）、8.問い合わせ先（電話番号、メール、担当者名）
- **写真**：4 点（①パッケージの写真、②生き物の写真、③生産者の顔・作業風景、④トップを飾るイメージ写真）

新米の季節にちょっと遅れてしまいましたが、是非とも、多くの生産者さんからの掲載情報をお待ちしております。また、消費者で田んぼの 10 年プロジェクトにご参加の皆様、ぜひ、お米を購入して、生物多様性向上に貢献をよろしく願いいたします。

### 水田部会からのお知らせ



#### ポール・マファビさんを悼む

9 月 24 日、ウガンダのポール・マファビさんが亡くなりました。ラムサール条約の常設委員、東アフリカ地域センター・コーディネーターなどとしてアフリカの湿地保全運動をけん引してきた方で、特に水田決議の啓発普及のため、東アフリカ地域のワークショップ(2016)を JICA と共催し、議長を務めたラムサール COP13 では多忙の中、RNJ のサイドイベントで講演（2018）していただきました。ご冥福をお祈りします。

写真：水田決議をテーマとした東アフリカ地域ワークショップで講演する P.マファビさん。

### 編集後記

豪雨や酷暑など、気候危機が年々ひどくなってきていることを強く感じさせられます。生物多様性も大ピンチ。コロナも発生し…。こんな時代に最も弾力性/回復力のある暮らしができるのは、地域で田んぼの活動をしている皆さんだと思います。これからも持続可能な地域づくりの手本を示し続けてくださることと期待します。 安藤よしの



### 情報をお寄せください

田んぼ 10 年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。是非、皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。寄稿歓迎  
また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」などというご希望もお寄せ下さい。

### ■ 田んぼ 10 年プロジェクト 新規登録者

2020 年 4 月～10 月

273	福岡県	団	田野のお米
274~279	徳島市	個	6 名
280~288	日本各地	個	9 名



田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。

### 連絡先/事務局

ラムサール・ネットワーク日本

info@ramnet-j.org

FAX:03-3834-6566



田んぼ 10 年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携推進事業に認定されています。



このニュースレターは、2020 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。

